

# 竹島明記 赤水図 広めたい

## 江戸時代のベストセラー

### 復刻版制作へ資金募る

江戸時代の地理学者、長久保赤水（1717～1801年）が手掛けた日本地図「改正日本輿地路程全図」（1779年初版、通称・赤水図）の復刻版が制作されることになった。赤水図には、現在の竹島（島根県隠岐の島町）が描かれ、江戸時代に日本が竹島の領有権を確立していたことを示す証拠の一つとされている。復刻版で赤水の功績を広く伝えようと、長久保赤水顕彰会（茨城県高萩市）はインターネットで資金を募るクラウドファンディング（CF）に取り組んでいる。（坂田弘幸）

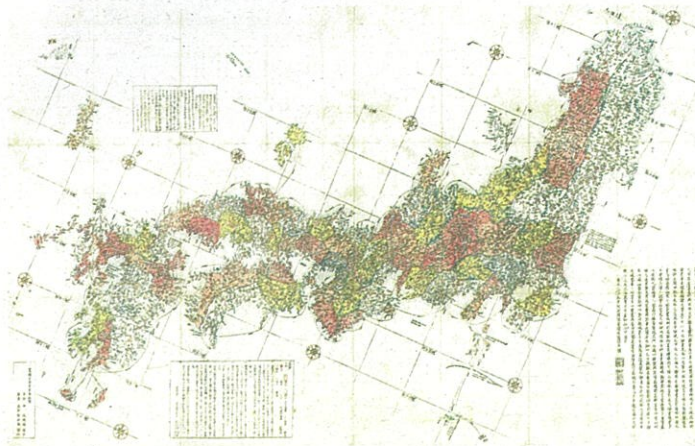
長久保赤水の肖像画



### 幕府が発行許可

赤水は、当時の地誌や伝聞などをもとに江戸時代後期の安永8（1779）年、経緯線が入った初めて

の日本地図である赤水図を完成させた。日本初の表測地図で知られる伊能忠敬の「伊能図」よりも42年早かった。赤水図には、隠岐諸島の



① 3千枚を制作する予定の「改正日本輿地路程全図」の復刻版  
（いずれも高萩市教委提供）  
② 長久保赤水が1768年に作成した「改製日本分里図」。竹島（現在の鬱陵島）と松島（現在の竹島）の位置を修正した跡が残る



北西に「松島」（現在の竹島）と「竹島」（現在の鬱陵島）が表記されている。幕末まで版を重ねて一般に普及しており、当時の日本で竹島が広く認知されていたことを示す証拠の一つとなっている。島根大法文学部の船杉方修准教授（歴史地理学）によると、連合国軍総司令部（GHQ）の統治下にあった昭和22年、外務省が竹島の領有権を米国に主張した文書に赤水図の拡大図が添付されていた。同文書には「竹島には朝鮮名がなく、朝鮮製の地図にも示されていないことに留意すべき」と書かれてい

### 調査済み注目

て、竹島の日本保持が確定した26年のサンフランシスコ平和条約に影響を与えた可能性が高いという。船杉准教授は「現在の竹島を初めて日本地図に書いたのは赤水の大きな功績。幕府の許可のもとで赤水図が発行されていたことは国際法上、重要な意味を持つ」と高く評価している。

赤水は常陸国、現在の茨城県高萩市の農家の出身。幼くして両親を弟を亡くしたが、農業の傍ら勉学に励み、水戸藩6代藩主・徳川治保に学問を講義する侍講に登用された。江戸幕府が伊能図を国家機密として非公開としたのに対し、赤水図は庶民に広く使われた「ベストセラー」で、模倣版も出回った。幕末の思想家、吉田松陰が赤水図を手に全国を旅したとの記録も残る。

### 功績再評価を

が記され、赤水が下図や原図の段階から竹島を認識していたことを裏付けた。赤水が赤水図の作成にあたって、竹島を日本の地として記した地誌「隠州視聴合紀」（1667年）と、竹島への航路を示した「日本志山陰部隠岐国地図」（1752年）を参照していたことも分かった。今年3月には、国の文化審議会が赤水の地図や文書など693点を国の重要文化財（重文）に指定するよう文部科学相に答申した。長久保赤水顕彰会の佐川春久会長（70）は「赤水は歴史上天大な役割を果たしているのにあまり知られていなかった」と話す。重文指定を機に赤水の知名度を高めようと、顕彰会は専用サイト「CAMPFIRE」で赤水図の復刻版の制作資金300万円を募るCFに取り組んでいる。期間は6月16日までで、寄付の返礼品として復刻版を赤水の誕生日にあたる11月6日に発送する予定。

しかし、既存の地図や自身の経験をもとに作り上げた編集図だったため、沿岸部のほとんど全てを測量した実測図の伊能図に比べて精密さが劣るとされ、赤水自身の知名度も低かった。だが、赤水の関係資料の調査が進み、やがて注目されるようになった。

島根県の竹島問題研究会が平成25年8月、同市で赤水図の下書きの地図「日本図」（1760年代）と原図「改製日本分里図」（1768年）の所在を確認した。いずれも竹島（松島）

復刻版は、赤水図の第2版を原寸大（縦84・6センチ、横128・8センチ）で再現。裏面には原図から第5版まで計6枚を掲載し、変遷を確認できるようにする。佐川会長は「赤水の功績が正しく再評価されるきっかけになれば」と話している。URLは <https://campfire.jp/projects/view/249538>